

『現代フィリピンの地殻変動：
新自由主義の深化・政治制度の近代化・親密性の歪み』
原民樹*・西尾善太**・白石奈津子***・日下渉****編、花伝社、2023年

岡 野 英 之†

今の政治をぶっこわす。そう意気込んで為政者になった人物は、どこの国にも大抵いる。日本では「自民党をぶっ壊す」というフレーズで知られる小泉純一郎（任期：2001–2006年）がいるし、評者の専門であるタイにも、実業家から政治家に転身したタックシン・チナワット（Thaksin Shinawatra / 任期：2001–2006年）がいる。こうした為政者は任期中にドラマチックな政治を展開するものの、その政権下で実施された施策がどのような影響を持ったのかは任期中にはわかりにくい。退任後に、その時代を検証することは研究者の社会的責務ともいえるだろう。本書はフィリピンに対してそうした役割を担った書籍である。フィリピンでは2016年から2022年にかけてロドリゴ・ドゥテルテ（Rodrigo Roa Duterte）が大統領を務めた。彼は型破りな言動で国連やアメリカを罵るなどたびたび物議を醸してきたし、超法規的な殺害を許容する麻薬対策を推し進めて国際的な批判を浴びたことでも知られる。本書は、そんなドゥテルテ政権期を中心に据えつつも、それ以前にさかのぼり2010年代以降のフィリピンの政治・社会を分析する。

そんな本書の最大の特徴といえるのが、相反する二つのフィリピン理解を提示することから議論を始めていることである。まず、「序論」において日下渉が一つめの理解を提示する。すなわち、グローバル化を伴う新自由主義的経済の浸透によりフィリピンの人々は自由よりも規律を求めるようになった（＝自由で気ままに生きるよりも、ちゃんと働くことができる真つ当な人間であることが是とされるようになった）。人々が規律を求めるようになったゆえに、汚職の取り締まりや麻薬撲滅キャンペーンを実施するドゥテルテ政権が支持されている、というものである。その一方、序論に引き続く「批判的序論」では上述とは異なる理解が、原民樹によって提示される。いわく、ドゥテルテは社会階層を問わず皆が望む政治を実施したからこそ広範な支持を得た。ゆえに日下の理解、すなわち、社会に「規律」を与えるような政策をドゥテルテが実施したからこそ広範な支援を得たという理解は短絡的である。その証左としてドゥテルテは、社会福祉制度の拡充にも取り組んでいる、

* 早稲田大学アジア太平洋研究センター助教

** 立命館大学大学院先端総合学術研究科専門研究員（PD）

*** 大阪大学大学院人文学研究科講師

**** 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

† 近畿大学総合社会学部准教授

okano.hideyuki@socio.kindai.ac.jp

というものである。本書ではこれら「二つの序論」（序論と批判的序論）において「日下＝原論争」を設定することで、フィリピンに対する理解を掘り下げようとする。

「日下＝原論争」が提示された後、本書は二部に分かれる。第一部「フォーマリティへの欲望」では、2010年代における政策や制度の変化が論じられ、政治学的な分析に取り組む章が所収されている（1～5章）。引き続く第二部「ままならないインティマシー」では現代に生きるフィリピンの人々が生きていく様子が文化人類学的な記述を通して考察される（6～10章）。その上で「結論に変えて」で本書が閉じられる。それぞれの章の要約は以下の通りである。

まずは第一部である。第1章「揺らぐ寡頭制」では原民樹が、2010年代以降に見られた地方政治の変容を論じる。第2章「包摂成長と再定住の政治」では藤原尚樹が、首都マニラの都市開発に伴う住民移転を取り上げる。第3章「「レッドテープ」からの脱却」では宮川慎司が、行政効率化の動きを論じる。第4章「発展する胴元国家、生き残る違法賭博」では師田史子が、ドゥテルテ政権により実行された違法賭博の合法化について論じる。第5章「スペクタクル化する「マンゴーの島」」では中窪啓介が、ギラマス州のマンゴー栽培を事例に新自由主義的な農業開発を論じる。

次に第二部である。第6章「再編される親密性」では西尾善太が、2010年代のフィリピンでは、生きるに値する者（例えば、まじめに労働する人々や出稼ぎ労働者）が社会福祉の恩恵を受け、生きるに値しない者（例えば、麻薬の売人や常習者）は排除の対象となるというように新たな分断が生じていると指摘する。第7章「「親しみやすさ」の複数性」では英語圏向けのコールセンターと日本人男性向け接待飲食業を事例に、田川夢乃がフィリピン人の「親しみやすさ」について論じる。第8章「OFWの身体に対する「遅い暴力」」では飯田悠哉が、日本の技能実習生を事例にフィリピン人の海外出稼ぎ労働者（Overseas Filipino Workers: OFW）が経験する苦労を「遅い暴力」という概念を使って分析する。第9章「他者への応答としての「リホック」」では吉澤あすなが、政治経済的な状況が変わる中で試行錯誤しながら生きる一人のOFWの経験を描き出した。彼女の経験を理解するにはセブアノ語で「動く、行う」を意味する「リホック」という単語の持つ意味が重要になるという。第10章「消費される未来、沈殿する過去」では久保裕子が、流産や中絶を経験した女性たちを描く。これらの章を所収した第二部の後には「結論にかえて」が来る。ここでは白石奈津子が「時間／テンポ」という分析概念を用いて、フィリピン社会ではこれまでよりも法や秩序が重要視されるようになってきていることの意味を論じ、本書を総括する。

本書の魅力を端的に述べるのであれば、フィールド、あるいは、ミクロな事例からフィリピンの変化が論じられることである。本書に参加した執筆者たちは、あくまでも顔の見えるレベルでの事例にこだわった議論を展開しているのだ。政治や社会を分析するにはさまざまな方法があるが、本書ではあえてミクロを見ることにこだわっている。もちろん、そこには捨て置いてきたものもある。ある時代における一国の状況を分析するには、政策の全体像や経済事情、マクロな統計数値など検証されるべき事象は多数あるものの、それらをあえて犠牲にし、現場から政治や社会を考えるということに特化しているといえよう。

とりわけ評価すべきなのは特定の政策に対する分析である。例えば、宮川論文（3章）は、ドゥテルテ政権が支持される理由は行政手続きの簡素化にあったことを指摘する。同章のタイトルにもある「レッドテープ」とは複雑な行政手続きのことを指す。行政の手続きが煩雑であるならば、それを簡単にするために賄賂をもらう役人が現れたり、公務員に個人的なつながりを持つ者が仲介ビジネスに従事したりすることになる。いわば、レッドテープは汚職の温床となってきたといえよう。

ドゥテルテ政権はそんな行政手続きを簡素化することで、人々の利便性を向上し、さらには汚職を減らした。ドゥテルテ政権が支持を集める理由はいくつかあるが、こうした取り組みもそのうちのひとつではないかと宮川は論じる。また、師田論文（4章）はドゥテルテ政権下で実施された違法賭博の合法化の帰結を考察している。同政権は人々が公然と行ってきた違法賭博（数字くじ）を合法化し、その過程で賭博の運営事業者を合法的な組合として再編成した。しかしながら、違法賭博はそれまでにも人々に抵抗なく受け入れられてきたため、新たに登場した違法賭博に対して人々は参加することを躊躇^{ちゅうちょ}しない。ドゥテルテ政権によって賭博の制度が変わったものの、違法賭博を許容する人々の価値観は変わらないままだと師田はいう。これらの論文ではドゥテルテ政権がどのような政策を実行したのか、そして、それがどのような帰結をもたらしたのかがよくわかる。本書の問題点として、ドゥテルテ政権とはどのような政権だったのか（あるいは2010年代とはフィリピン政治においてどのような年代だったのか）という総括的な議論は乏しいものの、各章による個々の政策の分析には説得力がある。

その一方、問題点もある。とりわけ気になったのが、本書が学問分野によって規定された思考のくせを乗り越えることができていないことである。本書の執筆者は、政治学と文化人類学という二つの学問分野から選ばれている。その一方、「二つの序論」でなされるのは政治学の方法論に則った問題設定であり。すなわち、単純化された二つの理解（説明モデル）を設定し、その間にある現実をつかみ取るための土台とするというものである。第一部に所収されている論考（概ね政治学者が書いている）は、その土台に乗った議論をしている一方、第二部に参加する文化人類学者たちはその「テーゼとアンチテーゼからジンテーゼを求める」という真実のせまり方に依拠していない。むしろ、個々が勝手に分析枠組（＝文化人類学者のいう「補助線」や「手がかり」）を設定して議論を進めている。ゆえに個々の章では研究対象の経験（例えば、コールセンターの従業員や日本人向け接待飲食業の店員、技能実習生や妊娠・中絶をした女性などの経験）を知ることができるものの、彼らの生活の在り方が「現代フィリピンの地殻変動」といかに関連しているのかについては見えてこない。二つの相反する説明モデルから議論を立ち上げるという方法は、政治学では身近な方法かもしれないが、文化人類学の方法論とは異なる。あえて酷評するのであれば、第二部の参加者たちは、二つの序論で設定された「土俵」に立たず、自分たちの土俵を勝手に作り、そこで独り相撲を取っているように見える。ただし、これは個々の書き手の文章力のなさとはいえない。なぜなら個々の論文は文化人類学的な論考としては十分に魅力的だからだ。むしろ、政治学者が文化人類学者を自分の土俵に引っ張り込んだものの、相撲の取り方を教えなかった（＝政治学の方法論に則った編著への参加の方法を教えなかった）ということもできよう。いずれにせよ政治学者と文化人類学者の間で学問の壁を乗り越えるための検討が十分できていないように思えた。

とはいえ、こうした問題点は、挑戦的な試みをしているからこそ出てくるものだともいえる。本書の執筆者は、三十代前半から四十代という若手から中堅ともいえるフィリピン研究者たちであり、いずれもフィールドから物事を捉えようとする姿勢を貫く者たちである。長期のフィールドワークを比較的最近行った者たちが大半であり、近年見られたフィリピンの「地殻変動」（＝政治や社会の変化）を現場から捉えるには最適の布陣といっても過言ではないだろう。しかしながら、日本では政治学者も文化人類学者も同じ土俵に立って議論をするという経験が十分育まれていない。本書の執筆者もまたそうだったのだろう。上述で指摘した問題点は、そうした壁を乗り越えようとする挑戦的な試みから生じたものであり、「やらぬ後悔」をするより、やってから酷評された方がずっとマ

シである。一つの国を理解するために学問の壁をいかに乗り越えるかという苦勞と成果と問題点を反映したのが本書ともいえよう。もちろん、各章を独立して読むとそれぞれに魅力が詰まっていることはいうまでもない。

最後に指摘しておくべき問題点がもう一つある。それは新自由主義経済が浸透する中で幸せになった人々について描かれていない点である。編者の日下は近年のフィリピンの変化を憂う気持ちを序論で正直に告白している。いわく「フィリピンのルーズで曖昧な社会は心の底から自由な空気を吸える場所に思えた〔……〕しかし、近年、私が愛したフィリピンが急速に薄れていくのを感じるのだ」。タイを研究する評者にも、この気持ちがよくわかる。同様の変化がタイにも見られるからだ。しかし、評者がタイで見てきたものは、社会に自由が失われていくと同時に資本主義における楽しみを謳歌する人々の姿である。ビールをじゃんじゃん空け、自家用車で週末の家族旅行に出かける姿は、タイが経済発展を成し遂げたからこそ可能になった。確かに古き良き時代は失われたかもしれないが、今の時代には今の時代の幸せがある。そうしたタイの変化を見てきた評者にとっては、資本主義の中で変わりゆく人々のポジティブな側面を描いていないことは、フィリピン社会の重要な部分を見落としているのではないかと感じた。

本書評では本書を酷評はしているものの、評者にとって本書は書評を書くだけに値する書籍であった。なにせ現場を見てきた研究者たちが、その経験をもとにフィリピンの一時代を総括したのである。そこには時代を生きる人々の息遣いが見える記述が多々ある。そんな魅力的な本だからこそ、粗探しをしたくなるものなのだ。